

— 広 告 —

KIT
キャンパス
レポート
文・杉村裕之



水落 誠（みずおち まこと）
金沢工業大学大学院工学研究科
電気電子工学専攻
博士前期課程二年
富山県富山第一高等学校出身

地産地消の再生可能エネで 地域に貢献し脱炭素に挑む。

蓄電池の制御を研究テーマにする水落さんの原点は、小学校卒業直前に体験した東日本大震災だったかもしれない。教室で強い揺れを感じ、テレビで見た津波や福島原子力発電所事故の映像が恐怖を増幅した。その潜在意識によるかは不明だが、KITに入学期もない修学基礎の授業で手に取ったのが、原子力発電に関する本だった。

「試し読みぐらいの軽い気持ちでした。そこで福島事故の本当の原因や、放射性廃棄物の処分問題を解決する技術の未来を知り、一気に引き込まれました」

この一冊を機にエネルギーへの関心を深めていく水落さんを見て、泉井良夫教授が声をかけた。「先生から『僕の手がける研究領域と合致するからいいぞ』と研究室に誘

われ、一番興味があった再生可能エネルギーをやろうとメンバーに加えてもらいました」。

泉井研究室が取り組むテーマは、「自分が使う電気は地元の資源を使って自分で作る」。まず、太陽光やバイオマスで作った電気を蓄電池にためる。その制御を直流で行って電力運用の効率化を図るとともに、EVを動く蓄電池として災害などに活用するシステムを通して、地域のエネルギー自立と脱炭素化を進めていくものだ。

水落さんが担当する蓄電池の制御技術は、このエネルギーモデルの重要な要素であり、パソコンを使って最適解を求めるシミュレーションが今も続く。これまでに研究成果を四件の論文にまとめて学会発表し、七月、香港で開かれた国際会議では英語でスピーチした。

「彼は研究室の後輩から兄貴のように慕われる存在です。学内イベントやインターシップの教育補助員とし

て三年次の学生実験も手伝い、本当に面倒見がいいですよ。人物評からは、泉井先生の厚い信頼が伝わってくる。同時に、研究室の食事会で見せた彼のエピソードには思わず噴き出してしまった。

栄養補給と称して出かけたその食事会で、何と三人前ほどのステーキをペロリと平らげてしまったそう。だ。「痩せているから本当に驚きました。財布も気になるので、最近はあるべく食べ放題の店へ連れていくようにしています」。

こんな血の通った師弟関係が、KITのキャンパスにはある。それは、人と人の濃密な関係性が人間力を鍛え、学力と掛け合わせることで、知識を知恵に変える総合力にしていくという教育理念につながる。その実践を目の当たりにした取材だった。

金沢工業大学

石川県野々市市扇が丘七ー一
電話番号(〇七六二)四八二一〇〇